里見八犬傳

九輯

五十一

特
イ曽4
600
289

イ4
600
289

南總里見八犬傳第九集卷之五十一

東都　曲亭主人編次

第百八十回下

義成功臣を重賞して八女を妻を重出

信隆舊城に還任して罪過を免る

再説義成主は八犬士四家老辰相清澄らを召聚て且宣ふやう。這回柳丸は従ふて參向をする。真利谷の老母が我近習に就て請ふ旨あり。其所以は柳丸は一個の女兄あり。葛羅媛と嘆做して今茲は十六歳に做りぬ。是が爲に婿娶を徵れども。いまだ相應しき所縁いなど。願ふは安房上總なる諸城主の子息達を擇せるひて。這婚姻を御媒妁あらばと。幸甚しからんとりく。真利谷は我外戚なれば。他ならぬ情願由なきにあらじ。我も亦憶ふ美わしどもそれとも猶いまだ決汝らも知る如く我は八個の女兒あり。开が中は妾腹なるもヨタうんど其母或は産後は

身故り或ハ短命なりけるとぞ皆吾孀が養ひゆて年迫ゐるりふり有徒れば孰も嫡腹ゐ異なるぞ我も亦他ぞ為ゐ奈く壻を擇ミ一女もいまゞ所縁ゐ反て他ぞ幸ゐるかな我今八個の女児をもて八犬士ぞゐ妻せまく欲をいでも志ゐ大士の賢支其忠其功八人ゐ我女壻ゐ做さゐ足まり各這意を汲よかしと亦他事もなく仰まれば八犬士ぞハ阿とぞうゐ応難ゐる開が程ゐ辰相と清澄い俱ゐ答禀まやう。御意羨りなりぬ八犬士ハ伏姫上の御子さるべ宿因ゐり然ば賢慮の至所誰ゐ不の字を禀まべき臣ぞも其美を豫より願ゝくとそいひけれと ゐを道節推禁めて御家老開ハ惶りゐがら臣ぞが思ふゝゐるらぞ柳臣ぞ義兄弟八名ハ當家ゐ宿因ゐりとも只一戦の微功をもて各城主ゐなされ志胸安ゐふざる所ゐ然ゐを況姫君達をもて妻とゝ下しゐらべ盈て溢く冥加ゐ盡んとの羨ハ獨忠與が賢達て辭ひ禀まふゐくぞ都一心異體ゐ義兄弟ぞも同意ゐとそと議して左右を見久まべ戍孝亂智自餘の大士も然ゝ然ゝと點頭て犬山説ゐて寔ゐ好恁ゐべ畏けまども目今舘の御威徳ゐそ姫上達を近國ゐ大諸侯ゐ妻せゐふとも皆欣びて是を容まん何ぞ家臣の渾家ゐ做さんや且臣ぞハ八名ハ伏姫神の故をもそ夙く知ら是まつりゝども仕ふる所ハ新参ゐて勤労久ゝゐるゐ上大夫の席ゐ置まそ采地一萬實の城主ゐるハ最過分き君恩ゐて人の娼嫉も影護ゐ然を又御配偶ハ實ゐ是物体ゐ約莫人の臣として富貴其君を推とゐハ亡ざる者ゐと稀ゝ伏請御家老達臣ぞが為ゐ御配偶の御沙汰を禀ゝ止るゐべく猶この上の幸ゐふんゐでくと諄返も甲一乙一ゐ送ゐ語を續言を續て一口中より出るが如く連りゐ推辭て已ざりゝを義成主推禁めて然ゐゐゐそ大氏の毎非如連城の大諸侯なりとも賢ゐ憑ざゝて富貴を負ひ我欲せざる所ゐ然ゐ忠臣ハ位貴く任重くゝて兵權

常ゐ有りとの人どもいよ〳〵忠誠ゐして其君を後ゐまるとるゝ蜀漢の諸葛武侯我國士南朝る北畠准后の如き是之矧又我八犬の賢臣をひそいもぐ嫁ざる八個の女児あり竟ゐ犬氏ゐ妻まるハ柳又天縁ゐ〻ぞや我意既ゐ決せり必ゐ辭ひそと面正しくぞ諭のふ君命脱る〻路もゐ紀八犬士ゐ〻おそるく稍言美を稟ぞめぞ辰相清澄も欣びて直元貞住共侶ゐ祝して千歳をぞ唱へける當下義成又宣ふやう柯を伐者ハ必斧をもてき妻を娶る者ハ必媒をもてを周人の詩ゐ詠まる所載て三百篇の中ゐ在り今我六郎兵庫助をもて這媒娵の媒ゐ約ゐせん武者助雑魚太郎ハ俱ゐとの美を相副て有司ゐ所要を課まべ但し我八個の女児ハ年ゐヨヲ少ゐりとゐくども犬士の年ハ相似ざる犬阪犬江只是のゝ自餘の六犬士ゐ年劣りて然べ今孰をりて孰ゐ妻せんゐの美分別まくらぶぞ誠や和漢古俗の常言ゐ約莫男女の疋配ハ其神ゐりて是を

ワヂヨヤ

嘗る我國俗の道く年の十月毎ゐ諸神出雲の大社ゐ聚合ゐりて世間の男女の爲ゐ疋配を做しゐふとゐ又唐人ゐふ所も是ゐ似ざる或ハゐ月下ゐ一個の翁ゐり書冊を開きて是を見る世間良賤男女の姓名と其年歳を識さる者ゐりとゐ是ゐよりて赤縄をりて男女の脚ゐ繫ぐと云ハ非如雙敵ゐとも夫婦ゐ做らざるとをゐぞ或ハゐふ氷下ゐ両個の翁ゐり相對て相譚を氷上の人是を媒妁ゐ世ゐ在る所の男女の疋配ゐりて是をりて媒妁ゐ月老と云又氷人とゐふ又唐山の妓院ゐて祭る神を白眉神とゐふ國俗の所云かゝふ神ゐ似て月老氷人と同ゐ〻ぞ开ハ左まれ右もゐれ我女児ゐの疋配ハ他ゐ〻ゐ各一條の縄を含ませて犬士ゐ〻ゐ是を牽せん其縄の本ゐハ一條毎ゐ名簿を締着誰縄ゐりて知らまべ犬士ゐ〻ゐ各其牽所の縄ゐりて甲ハ乙丙ハ丁と妻ゐ〻ぞを知るとゐハ天縁とゐりべ縦些の過不及ゐりとも誰ゐ訴誰ゐ怨ん這美

什麼と詳らかに示談ふ辰相清澄ら三人直元貞住共侶ふ只管ふ感じて已まず。八犬士らも今さらふ異議とべくもあらざるべ其計ひの精妙なると稱て美服さつまーらべ義成主うち含笑て然い我も欣び思へり。事生急ふ似たれども今日い黄道吉日ゑ先赤繩を行ひて女子い夜を宜ともふの故ふ婚姻の婚の字ハ女ふ從ハ昏ふ從へり犬士らハ點燭時候より。俱ふ朝服を整へて六郎兵庫助らを案内も出居の方へまで參らるべ既ふ我女児らふハ六のところを況さるべ准備を做ゆどめらんぎらむ徒而這八士八女の姻組相定りて納采の礼を行ふとも婚い桃の夭々たる來春二月下旬ふ做まべ大士の地ゆりて城ゑ者ゆハ修造料として金三十両とるべ速ふ工を起して城郭修造をいそぐらべ來春婚姻の祈ぶ。家作い大槩故成とべ豫ふの礼をとるゆて。大士らを齊一額を衝て君恩送る所るを拜しまつり。おそるゝ其欽びを稟しけり。姑且して

親兵衛ハ辰相清澄ふうち向ひて言卒介ふいへども禮ふ男子ハ三十ふして室ゆり後世い和漢是ふ拘らず十七八より娶る者ゆまども臣らハ年尚十五ふ足らず勿論仙くして男女の婚姻を定るを唐山ゆそハ結髮の夫妻とふ國俗の所云ゆひるげ是ゆりまつして成長ふ及びて婚姻を執行ふ者多く是ゆり。いまだ十六歳未満ふして婚姻を做も男子あるを少なりと臣らも亦是ふ。結髮の礼ハ美まつるべ婚姻合巹の大禮い御猶豫をとて願しけれと推辭ゆ義成主うち笑て親兵衛。汝い理りあるふ似たれども我思ふ。ハ生年二五ゆまども身の長い十七八ゆる少年ふ異ゆらず膂力ハ萬夫ふ敵をべく心術ハ白頭ゆる宿儒も及ざる所ゆり。何ぞ只年を數へて婚姻を遲礙せんや且明春の婚姻ふ汝一人を漏しるべ汝の妻ならん者必ず怨むべ。娶りて後十七歳まで閨房を俱ふたゆるとも又俱ふ甘ざるとも。汝い我知る所ふゆらず只常人の上を

して年を論ずと云々と推辭ハ要なくしてこそと理通て諭すべ辰相清澄勝を
找めて御諚寔ハ其理あり親兵衛が奇特なるも其義ハ思ひ足らざるゝハ年ハ
泥ミ故ハこそと執合まれば七犬士ハなるも大田豊後を首めて仁ハ代りて教命の
欽びを稟きゆゑ親兵衛今ハ已ことを辭ぜ四家老ハふうちゝ向ひて卒介の異義を
謝ふける徒而八大士四家老ハ今宵の一義をいそぐれて身の暇を賜りて退りて准
備を做き程ハ秋の日早く暮初て點燭時候ハ做りしゝ犬塚信濃大川莊介
犬山道節犬飼現八兵衛犬田豊後犬村大学犬阪下野犬江親兵衛ハ倶ハ光
絹衣長社祢ハて東辰相荒川清澄ハ引まつ後堂と前亭の間ハ山雞の間ハ伺候
を序次程よく羅列れる左右ハ銀燭いくつとも多く建列ねて白晝の如く明かるハ
夜の櫻の杪ハ似る犬士の骨相同ずるねど孰も二十前後なる威風凛々として反て
猛ふぶ笑るとなく三歳の小児もるゞくべく怒るとなく蓋世の勇士も憚るべ面見めり

浅黒きあり身長高くあり高くあるあり鼻直く唇横る人面の相似るも並
て同じくあるハ是仁義八行の玉を連ね好男子劣勝りハ多くあるハの
なる前面の坐席ハ錦繡の間道ある翠簾を透間もなく掛耳て這裏面を
姫上達の着坐とき其父ハ銀燭を多くべ翠簾の間洩灯花ハ馥香とれて風
さきハ春の曛音ハ似るべく色濃うける丹楓の山ハ秋の斜日の刺ハ如誠や
義成主の八個の伶愛の第一の君を静峯姫と喚做て十九歳ハ第二の君ハ
城之戸姫第三の君ハ鄙木姫ハ同庚ゆて十八第四の君竹野姫と第五の君濱路
姫も十七八歳第六の君宗姫第七の君小波姫ハ共ハ二八ハ第八の君牙姫ハ
年三五なりけれども既ハ生情漏て身長も大人備なべ女兄君達ハ優るるハ似る
反て第一の君ハ形貌小さく痩肉なるべ那学ハ中ハ舞ひ一とハ趙飛燕ハ似るひ
けん孰も稀る美人なれば肌膚ハ雪を塊ね玉を延るハ異なるべ翠雲の長

やうやう立べ裳裾ゐ至るべ。花のよべいまゞ開も揃いぎ。月のよべ十のまう。三日の影も
のゝべ〳〵ん心ざゐも皆愚ゐぎ走筆縫刺の技へさらん官絃の游ゐ。も疎かゞぎ。
生平ゐ宇通保源氏物語を枕の友ゐ。て歌をさえ讀のゐもあり。或へ物の本を好
ミて文の支めるも綴りて人ゐ見せゐへねい世ゐ聞えざるゐるべ。間話題休恁而這
八個の姫上達へ頭ゐへ玉を鏤うる花の釵児を戴紀身ゐへ縫ゐ泊揭泊色々の衣を
被飾りて儲の席ゐ就のべ給事の女房ゐも今宵を晴と打扮て各各も侍坐
たり是やまの錦の上ゐ花を添うる温柔妖艶の妙ゐるも皆洗簾の内ゐれい犬士
ゐの目ゐ見えざるを憾とまべ。姑且て給事の老女出て來て二家老と八犬士ゐ今宵の
壽祝を舒ゐべ。て却辰相清澄ゐ事の進退を相譚ふよ。ゐり其言果て退けば翠
簾の内ゐ氣色。て絳ゐ染做。うる八條の太緒を出されけり辰相夙く是を見て。
立て其緒の端を含て徐ゐ曳へまるゐ長さ一丈二尺許ゐり既ゐ曳出。畢りて八

條を揃て席上ゐ閣けば八犬士ゐこゝろ沿そ。俱ゐ徐ゐ進こうて各ゐ其緒の端を
含て各左ゐゐ是を結びつ。引けば聊ゐ敵ゐり。迭ゐ引ぢつ引まつて竟ゐ放ちゐへ
ゐを各急ゐゐ繰り寄されば果て那方の緒の端ゐ各其名を薄を附らまけう。
辰相則膝を找て一箇々々ゐ其牌を合て抗げつ得と見て聲高やうゐ是を讀を
内外齊一うち听くゐ第一静峯姫上ゐ犬江親兵衛仁第二城之戸姫上ゐ犬川
長挾荘次義任第三鄙木姫上ゐ犬村大学禮儀第四竹野姫上ゐ犬山道節帯刀
忠與第五濱路姫上ゐ犬塚信濃戍孝第六栄姫上ゐ犬飼現八兵衛信道第七
小波姫上ゐ犬阪下野胤智第八第姫上ゐ犬田豊後悌順各是を引ぢうう天
縁の致を所御配偶皆定りぬ千秋々々萬々春。と祝されば翠簾の内ゐも女房
等の衆聲ゐて萬福々々とぞ應へける當下荒川清澄ゐ准備の料紙硯をもて
件の男女十六人の名字二通を寫を程ゐ給事の老女又出て來て両家老八犬士ゐ

翠簾を隔て八犬士
赤縄を援
よしうら
やまより
のぶさち
さとみ
ちゝさと
ちゝさと
清をみ
とゝさと
さとみ
さとみ

其二
八小姐天
縁良十を
ゐねる処
ひなぎ姫
ろう女
ちうと姫

竹の姫
えんど姫
ろう姫
いちご姫
ぼたん姫

事の欲びを舒ぶべき清澄則丕配の一通を照ふとそ老女ふ遞與ハ受戴ぜて退り
けり。住而八犬士ハ當席を退きて。俱ふ宿所ふ罷るべ又辰相清澄ハ躯て
後堂へ赴ぜて義成主ふ見参し。姫上達の御配偶ハ固様々々と申上て
寫志し一通を呈閲ぜぬとべ。義成主今ハ犬士ハ大ぶ心つらく。と是を見て六郎兵庫ハ
心も屬ぎや我女児毎の皆嫻ハ前より定まるふ似ぶう故何とうべ皆是
名詮自性ぬり。警ハ靜峯ガ仁の妻ぶ語ふ所云仁ハ靜ハ仁者ハ山を樂ひ
あつふ疾し。然ども靜峯ハ十九歳ぬそ仁ぬハ九歳の姉ハ。何ぞ這年の長ぶるをもて
那年の殊ふ劣ぶるふ合せしやとも。後ふ知るべしハ旦城之戸ガ義任ふ
於るや古語ふ義を守ると城の如しとの不ス由ぬり又鄙木ガ礼儀ふ於るや其故
妻の雛衣と文字とを異ると唱ハ似ぶう且鄙ハ犬村の村ふ對ぎべし又竹野ガ
忠與ふ於るや忠ハ苦節ふ顕るハ節ハ道節の節ぬそ助竹ハ助ハ野ハ大山の山ふ對きべし。

又濱路ハ甲斐ふぬり時戍孝の郁助を沐て且道節ふ那窮阨を極れぶう刎又
戍孝ガ故の結髪の少女の名も濱路ぶそ濱路ぶそ又ぶふ
濱路ぬり。ぶと再生ふぬぶ。他ふ代るぶそのべぶうん又菜ガ信道ふ歸やとも
由ぬり道の信を做ぶ者ハ菜ハ据ぶれべ道ふ惑ふべ又小波ガ亂智ふ歸や
大ぬ亦語ふ所云智ハ動く智者ハ水を樂ひとぬり。賢し水の動く時ハ波ぶ
今波ハ則水の皮ハ。ぶそ其字水ふ從ひ皮ふ從ふ智も亦動ぶれべ用る所
ぬ是智者の水を樂む所以欲又弟ガ悌ぶ順ふ歸や悌ハ則兄ふ仕るの道ぬり且
悌順ハ仁ガ外伯父ぬれども反て悌王を沐ぶう其ハ行ふ由時ハ仁義の弟ぬ
沐ぶそふの故ふ弟姫とぬと妻とを皆是名詮暗合ぬり。是ふ不測のひぶ。と其
理を推て解ぶ人ハ辰相清澄感服し隱微發揮の御妙解ぬそ筆て解語仕ぬ
現ふ天縁の動ぶき自然の妙契を知るふ足ぶと稱て敬祝志ぶうしべ義成又

謀るやう。配偶既に定りぬ且は夙く納采の礼を行ふべし。然ども大士やちはいまゞ其城に徙られば是等の事にも不自由ならん。六郎兵庫相資て東西皆質素に整させよ。と遣はしあるを。さきのゝべ辰相清澄兼りて躰ぞ退り出ける。然べ辰相清澄は次の日大士等が出仕の折義成主の解なひうる名詮暗合の妙契と納采進上まゞとある仰を具に告知まれば大家感ぎる斗ぶ中に亂智がりやう名義暗合のひとも。昨宵臣等も宿所に還りて不圖思ひ付うーらども。然まだに深くい考果さぎ寔に舘の御宏支感心の外いつぞとそ其一二を説示せば戌孝も倶にありやう故の濱路のまひも只結髪のゝうるに苦節を守りて命を惜まぎ。夫人左母二郎に殺されて烈女の名をのゝ送ーらば我他ー女子に娶らゞをのゝ思ひーぷ恐ぶり姫上も亦他と同名にて且甲斐峯の奇事あり。竟に我戌孝と皆嫻自然に定りー造化の小児の配剤欽一大奇事ぬいひたとりべ禮儀も倶にありやう臣等とも雛衣が。

腹を劈ぎ玉を非虫て親の讐ぶる妖怪を仆せー他が功を思べば復娶るべくもあらざりーに雛衣鄙木の稱呼似ーるに實に舘の御諭にて斷ー那緒を續る者欽。とりふを義任推禁めて卒先舘に拜見ーて君恩を謝ーたるべーとのりよ大家諾ぶにて辰相清澄共侶に義成主の身邊へ參りて。許嫁の恩偶を拜ーまるりたらば義成主笑ーげに各天縁既に熟ーて我女児毎對をぶられば欽び是に優きまとぶー。就て鄙にもいひけらー。真利八谷柳九の女兄甚羅媛の皆嫻の我意ふに政木大全に妻せるべ支親家門相應ーらんとの美へ明春下野長挾なる媒妁ー七宜く相計ぶさせよらーと仰に大士等皆欽びて孝嗣も亦新參にて勤功久ーるぶるに今又恁る恩命を他美りいつぐさと感悦士らめとのに辰相清澄も倶に祝頌まるらける。姑且ーて道節がのやう四境りるく理りて君恩偎くいに只廳南の一條のゝいまぐ其後の御制度を美いらぎ。那美へ什麼と問

稟せば義成主點頭て然へとよ其事い六郎兵庫こそよく知りたれ先始まろ告ざやと仰ふ辰相清澄い阿と応つ忠與そふ向ひて各位も知如く隆人武田左京亮信隆い去歳の十二月初旬水路の寄隊ふ従ふて二裏伐をべーと請稟しつ。保質一條丹四郎信有をまねふせて舊罪赦免を願ひーべ館其芙を御許容ありて當日戦功衍ぎまい則他が願ひの隨意其旧舊領ある廳南の城地を返ーゆべーとて照文一通を合せるひさ這芙の大阪大山の奉行ひー所ふれいのでもあるるとるるぶら端倪い且如のでー尓るふ信隆い十二月八日の聞戦ふ定正主ふ従ひねがら。洲崎へいうち向ふぎ。徑ふ艦を横行て上總の浦邊ふ推渡ー悄地ふ廳南の城ふ造りて城の頭人江田九一郎宗盈ふ告るやう。唱ふへ里見殿と約束めるふうう則寄隊を欺き離れて目今歸着致ーこう。當所い里見殿の返ーのひける我舊城でいへ。速ふ開渡ーいへとて挑ぎーを。宗盈听ぐと然へとよ館の御照書めるとも未

當所へ御下知ふるるふ。ぐでよ當城を遽與さんや。其芙ぞふべ且退ぞ。後の御沙汰を俟ふへとのふを信隆ぞのぎ既ふ照書めるる上い又今さらふ何ぞう俟ん疑ーくい稲村へ夙く使を走らーね今速ふ遽與ぐくい。唱い我二の城ふうち入てんと答る果ぎ三七二十一ふ隊兵三百四五十名を萬ゆそ二の城へ稠入りつ。那里を守る老兵を一人も漏さぎ追出ーて門戸を閉て執合ねべ江田宗盈怒ふ堪ぎ忿ふ士卒を推萬ゆそ。

敷ふ果さんとそ敦圍ーを第二の頭人畑夏作遽ーく諫ゆそのふやう。信隆傍若無人ふんども館の御書を照据ふ其芙を訴まるふぎーて。同士敷ぜ せべ後悔ゆらんよの芙を思ひるへぎやとのまそ宗盈爭難て則急遽脚の使者をりそ。

信隆の非理非法を館ふ訴奉りて御旨を請けるふ館い驚馬きのとるく其使者ふ仰まるやう。現ふ武田信隆へ智計ありふ似くれども。其性奸(性カ)ふーて獨立まく欲をちをりて當城ふ來て恩を謝せぎ。徑ふ舊城ふうち入て又蚤く宗盈やるふ代ら

まくを他が理不盡勿論なれども。今急ぎ殺害せば人の不仁を做ふに似たり。非如
舊城廳南なる二の丸に籠るとも。僅に三四百の隊兵をもて何事をか做ひ得廳
南の民他が舊恩を德とせば義成が民たらまく欲さば信隆竟に身を措難て。
悔て罪を謝まる日あらん。他が敗を取折まぢうち捨て置べしと則下知狀を宗盈
に賜りて其使者を返しゆけり。是よりの後信隆が二の城に在る所の戰粟を
合用ひて己が自恣せざるのみなれば。江田宗盈憤念に堪ず屢使をよわ甚
敷果さんとて請稟ありしを館にあり許さざれども只うち捨て閣べしと殊なる御
下知なる故に和殿等に仰渡されぬ。保質一條丹四郎なる者が儘濫田に
閣るべきと告るを道理節義なるべし。亦館の御仁恕なるべし。信隆が奸詐なる曩
に館を欺きまろして反て寄隊を裏伐せば。推て廳南に赴かば舊地を横領せ
まく欲まる。其罪いとく輕からぬをもて誅伐做されぬ。猶叛く者ヨタるべしと

議まるを亂智推禁めて。犬山井に遣へり信隆奸詐とのべる。他も一に固の豪傑なれば
道理を知る者なれば。他が出没恣にて廳南ゆうち入りしに稟解よしなるならん。
然に館の御計ひ寛仁大度に優なるべし。固の詞にまぐ詐ぬ一に固の青侍廳の檐廊へ
來て告るやう。廳南なる江田九二郎宗盈が武田信隆の事に就て稟上べきもの
第二の頭人畑夏作が信隆を將て參上りぬとのよし義成主うちゆて世の常言噂を
されば影刺といはのうるらん。先夏作を召べしと仰の青侍ども遠く退り
たるべ八犬士両家老の席を正して侯程に畑夏作通豊の紛裝の儘に七青侍の
引き來て義成主に拜見を登時義成主に大阪大山二犬士ともに先其故を問せ
ゆふに夏作則稟まやう武田信隆が非理非法の為体に曩に訴奉りし如。
介るに信隆が隊兵に甲斐の武田の士卒なれば他が威勢竭りて戰栗さに
竭るを見て久しく留んとを欲せば。日毎に十人二十人病に假托りて去り。

甲斐へ帰り去りしが残り信隆が従来の隊の兵五六十名を做りふけり信隆是を
ものうく憂ひていうやうこの地の荘客們は舊恩を説示して我軍役を充んと思ひて
有一日小鷹狩の假托けて士卒十名許を將て悄地の城外へ立出て地方の村長
故老等を幾名か召よせて且のたまはく若們は我舊領の民なれば今より我に従ひて
二季の調貢いさゝか壮なる兵毎に我を資て第二の城へ肩ん龍るべしとのたまひしを村長
らは辭を兼引ぎ詞ひとしく辭ふやう當所は里見殿の御領なれば御仁政を義まも
つまで御恩の下なれば御身に従へとのたまひ御下知もあるにあらで然る僻事を仕らん思ひも
かけぬものなりとて立去まく欲するを信隆急に喚禁めて諭ども聞ざれば竟に怒を
ひ堪ぎ七刀を是りと抜くるも見せぎ一人を礮と斫仆せば大家驚き且怒て狼藉
者めく極へくと叫ぶゆゑ四下近辺の荘客們ふるふ連枷を携て百十數名走り
來て信隆主僕を捕稠て面も振せぎ撃悩せば信隆も伴當も力をゆ尽て受

流し打拂ひて戰ども多勢なるに物ともせぎ剰加勢の荘客們弥が上に聚合
來て只直打に撃まくべし信隆の伴當は一箇も逃のがれ仆されて信隆も防難て
既に必死と見えける折から城の頭人江田宗盈馬を蜚して馳出て喚いつる騎入
騎入荘客們を禁る程に宗盈の隊の兵も赶つ城より走り來て俱に信隆を
救ひけり當下江田宗盈は村長故老等を召よせて事の起原を尋ねるに信
隆が理不盡なる然るまで罪なき荘客を矢庭に撃ちのせ故に壮佼児毎に
堪難てその趣舎れいとりに言分明なりしに宗盈は村長等が訟に及ぎして
芋且ども舊領主と聞詩に及びしを叱りて孽負を勤らまるに斫られる
荘客は窮所のゆゑに死の至らぎ又信隆の伴當は撲傷られぎを折れ
脚を折られて仆きしのを是も命に恙なければ宗盈急に醫師を招ぎて甲乙
俱に療治せしむる五六日を經ぎ安うるべしとの是により荘客們ぎ金瘡児と

東京堂蔵

俱に還し遣るの信隆主僕さそぶ儘に城内に扶入るに信隆先非を後悔して宗盈に勸解るやう咱ち洲崎の陣に参らざりしに當城のうち入りたる西岐武士ふるひ之之故何とぞ定正主の隊を離れて裏伐せざるは是義と倘欺きて裏伐せざれども當家の御方に参り上い悪の悪さる者ゆえ兇賊の輩しめ之し然い裏伐をせざれども當家の御方に参り上い功のしたまへかくぞ又里見殿の請禀さそ當城のうち入りしに暴に賜りし照書ゆり且這地い我父祖三世の舊領なれば民皆舊恩を忘るゝとなく必や信隆に従ふるらんと思ひしに思ひきや莊客們い里見殿の善政を慕ふて信隆を徳とせずして反て事を惹出して這辱めに逢ひけるは人を知ざる己を知ざる信隆が不覚にて後悔臍を噬るのみ。いざ稲村へ推参して是ぬるの罪を謝せまく欲をまの義を執達ゆまるしと啣言かまへくうち陪話て則神文の誓書一通をまろらせて赤心を示ちしに宗盈やう〳〵受容れて臣畑道豊に其義を課て士卒百五十名と俱に信隆を送りて

参着仕りぬと言詳に告禀せば義成是をうちゆて信隆の誓書を道節に讀せゆに歸降の文分明に義成憶ぎ含笑て然いそのいざるに欺信隆竟に敗を取て今い真實に歸伏せり然べそ賞罰明らさまに後の戒臣を懲しかさり信隆をば卯東小六荒川太郎一郎に預けて城内なる一室に五十日閉籠措べ恁ても怨ひるおろかく我對面して舊地を返さん下野と道節いまの義を小六太郎一郎に伝へべしと捉て江田宗盈ゆに下知状を賜りて畑夏作を労ひて。廳南へ還しのひけり小程に信隆に明相清英晉りて龍居五十日に及ぶものゆ聊も怨言なく只恩免を請ふと雖ども武田信隆を召出して正廳にて對面あり八犬士四家老并に政木大全卯東小六荒川太郎一郎等ぞ伴うける登時義成主仰出さるやう武田信隆機変を獨立の罪ありとい之ども竟に新に真實歸降たぬる上い舊

罪を赦免して舊領廳南の城地を返し與ふ今より機變を紛ふことなく只善
政を旨とせよ縱機變をもて恣ふ城ふ入るとも民從ぎい誰と俱ふ守らんもの
美をよゝく思ふべしと叱責ふ鉞めを受が信隆い頭を敲れて羔服せざるのふと
ふ義成又仰まるやう信隆士卒減少して五六十名ふ過ぎと又い當城の士卒
假て大阪下野ふ送らせん夙く還任致まべしとそ身の暇を賜りけり然い大阪
亂智い士卒三四百名を率て信隆を送りつ廳南へ赴折義成主い保質一條
丹四郎信有をも信隆ふ從ひて返しのふべりしふ他い里見の德を慕ふて仕へく
欲しを願ひしつべ开が儘瀧田の城ふ在せて延崎照文の隊ふ隷ちれけり任而大阪
亂智ふ武田信隆ふ相俱して廳南の城ふ來ら城の頭人江田宗盈畑道豊ふ
君命を偽と示して城渡のるを課まるふ他いるも其あろ沼ふまべ事立地ふ整
ひそ信隆と交代を又宗盈道豊い這回の相計宜しけまべとそ義成下知して

他いるべ大江親兵衛が返しまろりし上總國舘山の城の頭人ふ做しるふ這
美も亂智ふ達ちまべ宗盈道豊い宅眷并ふ士卒四五百名を率て徑ふ
舘山ふ赴ぬそ那里の番士と六父代と生涯其城を守りけり又大阪亂智い
廳南の村長莊客ふ義成主の下知を傳て城主信隆と和睦せしめ且隊
兵二百名を留めて稲村へ入り去りぬ然い信隆の宅眷殘兵の遠近ふ潛居る
者主の選任を傳ひて皆欽ひてゆくり來ふければ稍大勢ふるる隨ふ里見の士卒
二百名を武田の老黨を相添て稲村へ返しける是よりの後信隆い
地を理しべ久しく廳南を有ちける按るふ房總志料上總の部ふ里見義改の
時廳南の城主ふ武田信栄とふふ者あり甲斐の武田の庶流なの信栄い
里見ふ從ぬ獨立とりゝ意ふ件の信栄い信隆より二三世の孫ならべし但
信栄の事いまだ詳らかざれども作者前後ふ借用を看官是等の用意を知るべし

第百八十勝四郎狐龍化石を貽して大蟬脱を
八行璧を反して八行十世に傳ふ

復説武田信隆が廳南の城に還任して本領安堵せしめらるゝ千代丸圖書助
豊俊も戰功によりて罪を許され其舊領なる上總國槇本の城へ還任せしゝ
宅眷老黨の人々さらに安房上總に躲居る千代丸の残兵等早く是を聞知り
且驚き且歎ひ勇みて日ならずして聚ひ來れば城内士卒の医らず家門繁昌
あらけ。徒而次の年の春二月義成主の八幡宮の小姐子。八大士に遣嫁のうわり。媒
妁児東辰相荒川清澄這他老黨有司奉りて男女の伴當を點配し納采調
度送りの式ありて當時よりむかしの書に詳ゆて足利家の時俗の禮を粗知る是
さいに又いべくもあらず。その時大士等の新城もいまだ成せざるもあれども居宅へ
都て造り出せしゝ各其所を設て新婦をぞ迎へける。洞房花燭の歡會に賢も不

肖も異なることなるべし。扨が中に大江親兵衛のぶ當晩靜峯姫と。相衣合巹のぶに
そいはぐ臥單を俱にせず。悄地に是に告ていはく。見らく如く我身に大人備て心
術こそ穉けれ年尚十五にざれば足らざるに風く色情を動さべからず。倘今男女の
交を做さば曩に八百比丘尼狸の妖術にて立て浮名を又さらに人の疑ひを送さ
べしとの故に我年十七に至るまで峯上隔つる山鷄の雌雄の宿に做まくきとの爲を
饒しゝめくゝと又他事もなく解示さを靜峯姫ちゆメて宜に趣理りに付り関
睢ハ樂て淫せずとは空ゆ記夫婦ハ一世の恩愛なりにあでの添臥をひそべ左の
右ゆも御身の隨意行ひ給へと忘ゝ是ようの後六稔あまり。枕を並て睡るまと
なけれど然べとて疎らず生平に良人を敬ひて反て意中に親まり。恁而親
兵衛が年十七といに春の比より夫婦始りて衾を累て比目連理の枕を並ふる
遊仙窟中の夢を結びしを人後に知りて感嘆せざるはなりける。ちら是後の

話し然ば大士さるが婚姻の後政木大全孝嗣も亦君命ふよりて大阪大川嬢妙
ゆゑ真利谷柳九の女兄葛羅媛と婚姻の欽びあり上總より推津の城より姉女
同國東潛郡大田木の城へ迎入まられて僧老同穴の契浅らざる又照文の女児
山鳩い年十三の比より吾嬬前ふ給事し七あり しまの時十八歳ふて身の暇をあらて養
嗣紀三六の十三郎照章ふ妻せけり皆是君恩の厚ふよれば各其欽び知るべし尓程ふ
政木孝嗣ハ既ふ大田木の城主ならいまだ房總の地理を知らねばまの年の夏義成
主の願ひ禀て七國中を徧歴を素より微行るれば伴當るとい最畧して士卒六
七名ふ過ざるべし身も亦騎馬ゆゑ歩ようゆくを便利を先大田木根小
屋の城より遠らぬ東潛天羽の三郡より創んとそ普善村硯の里雜色村を
過る程ふ伴當の中ふ御道守の老兵あり孝嗣ふ告るそう方便過せるれ普善村
好布施村ふ作る
在昔上總ふ廣常の住し所ゆゑ舘の遜あり然るを今ハ土人も知る者稀又

あるより程遠らぬ舘山の城の四下ハ昔者廣常の山莊るりければ今も舘山の名貼り
たり然ば安房る舘山と同じらいぞ是ぞハ見ぬ世の事るれば正き照据もいぞ今現ふ
硯ふ隣まる乙埜村ゆへ那神童增松和子の實父阿弥七吏の宿所あり それよりも
猶近る這雜色村の内中宇古江てふ地方ふ醫王山金光寺と喚做しる一座の
梵刹ゆり あるる台家ゆゑ本尊ハ大日如來ゑ這金光寺ふ廣常の子息の墳墓
ゆり因て山號を古塚山とも喚做しう 這寺内るる山脚を穿ちて洞の如くるる所ふ
故るる無銘の五輪石塔婆ゆり土俗相傳て上總ふ廣常の墓るりとのう虚疾を
患る者其石塔の苔ハ難を削含て水ふ浸して飲時い即功ゆり瘥ざる者ゆるとい
とそ折々其苔を採る者絶ざりとのハを孝嗣うちゆて上總ふ廣常い鎌倉創業ふ
功臣るまども功ふ誇りて忌憚らぎ屢嫌忌を犯せしゆへ頼朝卿ふ疑れて罪るを
誅せらるゆき升ハ壽永二年の支るりを載て東鑑ふ詳し先ハ我も立より其

石塔婆を見てあらんと応つ歩を進めて稍金光寺の門前投て來かける程の天猛可か結陰りて疾電光勁風か雨を吹て地野千玉の烏夜か乾坤忽地に降天ぎ乾坤忽地野千玉の烏夜かゝりぬるかと一もあらぎ數道の金光四下と射て天とう揺と墜る物の其音大地も頽るゝ如く人堪ぐくもあらざれば孝嗣主僕い吐嗟とたゝう赴りて老る松の下か身を潜しつ忙然と聚立てゆける程か姑且して雨歇天霽て日光隈なく刺を隨か孝嗣主僕い晴を定めそ目今天とう墜るい何ものらんとそ俱か見るふ正か是最大きなる石かぞめりける。壁言ば其形狀宛蟠る龍の像く頭か虬か似て虬かゝらぎ狐か也。似る樣ゆ尾とおがゝ紀者九ッゆ。縱横約三尺計。紛ふぐくもゆゝぬ白石なれば。伊當詠る所が中か孝嗣いつらくと見つく吐嗟か思ふやう原來這狐龍の化石い政木狐が約束通つぎ。他い既か數晝て終ぬかゝ示せ。なるん奇之々々とたゝうか只顧感嘆ぬる折ふ。這寺の門内より。沙弥道人と共倡か立出る三個の武士ゆ一個い年四十許両個い三十前後ゆ。孰も骨相鄙ふらぎ一對なるねど各各。身ゆ葛の野袴か裙裂の單外套を被て大小の両刀を帶なるが伴當騎兵とおがゝしき者十四五名ぞ從ふなる。約莫ぬの僧俗い墜なる化石と孝嗣主僕の立在なるを見出して胆を洗しつ指さして那人達い震れもせでよくこを堪され最奇之とゆ間か一個の武士い孝嗣を沙を見て。所い政木主なるぞ武田信隆ゆそいとのいまて又孝嗣ゆ急か其方を見なゝ然ゝいぬる比稲村ゆそ初て對面致なる武田主恙なるぞ一廳南なる路近なるぬ當寺へ何ぞの所用ゆりてみぐなる詰なるいなると。問れて信隆然ゝ咱ぞい前月瘧疾ゆ醫療即効ありしなべ俗説か從ゆそ當寺へ使を遣しつ上總介廣常の五輪石塔婆の苔を採せて。そを腹用ぢいひしゝか疾病立地か癒り果しなべ感謝か堪ぎ悄々地か賽をぢいなる。和殿い又何ぞの所用ゆりて這頭を過りのひぬる折ふ今の

暴雨天変恐るべし。這大石を撲ぶるの力ざりけるは是高運の致す所。神明佛陀の加護なるべし。寔に賀ぶべく。と祝せば孝嗣礼を返して。原来廣常の墓石の苔へ効驗虚談なるべしとぞ。洒家は新参なれども二總の地理を知ねば館を願ひ奉りて。隈なく履歴なる隨に。當寺の廣常の五輪塔のありとは知りて見ばやと思ひて來かけるに暴雨に路を去るべし。剣化石の天降るに逢ぬ。在昔唐山姫周の時宋の石墜る者云々と春秋左傳に見えたり。或は又星墜て石になりたるものあれども是はそれに同じからぬ。見る孤龍の化石とのみを信隆誇りて。孤龍は柳何なる物ぞと問へば孝嗣然いとよ。白狐既に千歳を歴て其功徳ヨタなる時は化して龍になる物なり。是を孤龍と號做しなり。あるは傳説の事なるべし。去る歳の夏前面の岡にて我必死を救ひしなる政木狐即是なり。這政木狐の事いまも。説まくまるに言ヌけるとは亟の畫ーがくなりけるとの間に両個の武士も共伴に找こ

孝嗣のうち向ひてあるは政木主初て拜面仕る卑職なり。館山の城の頭人。江田九郎宗盈畑夏作通豊のていと近曹館の御ふりて廳古南より移轉して館山の在番仕りのへぞ。這頭なる神社佛閣の古記録什物を展覧の為に今日来る當寺へ來ぬけるに料らず武田主に來會せるは今又和殿に對面の歓びは只是のみならず。耳新きまき孤龍の化石を見聞幸ひヨタなりとのへ孝嗣礼を返して豫て聞知る江田畑両生思ひがけなく對面はよりて折りあれば却て這化石の事に就て當寺の住持に面談して請まくかしこう思ふよりいろで詞を添のひねと憑べ宗盈異義もなく開ことろ沼ひと誘ひ客殿に且猶餘談を兼らん武田主も共伴にと誘引立れば畑通豊は先に立て案内をまで。然べ政木孝嗣は信隆宗盈と共伴に自他の伴當を相從へて引きて寺内へ入る程に。沙弥道人は側聞して疾方丈へ告んとて走りて先へ退りける。

金光寺の
門前ハ狐
龍正覚を
示す

迹ゆへ近所の荘客们天より降る石を見んとそ走り聚ふ者堵の如し又寺よりも年少き生僧等の立出て觀もヨタるべし。亦程ふ政木孝嗣い武田信隆江田宗盈畑通豊等ふ案内をせらまそ先廣常の墓石を見るふ果して山脚ふる沙洞の内ふ在り。現ふ最小ふる無銘の五輪堂なれども半分い亡て高さ二尺ふ足らぞ只青苔ふ裏まそ之まうとも見えざまとも孝嗣い憮然として一霎時謁して且りふやう

在昔上總介廣常い當國の人ふして二萬騎の大將なりたりしかども身い誅せらまし國亡びそ子孫斷絶ぬるより今ふ至りて觀へ者い只羊体の五輪堂のみ抑亦悲しらぞ。世ふ相將の威權壯なりとい車馬門前ふ満ざる日なく倘其職を去るとい殿庭ふ雀羅を張べし。栄枯得失の理り誰ふ竟ふ免るべ。とのべ信隆宗盈通豊皆共侶ふ嗟嘆ふ打連立て玄関ふ赴けば役僧早く出迎へて。躾て客殿ふ請待ぬ孝嗣則正客ぬ宗盈信隆い左右

通豊い下坐ぬぞ付りける。然而者茶の礼畢りて住持出て對面ぬ當下江田宗盈い住持ふ孝嗣を引合して化石の事を説示せば孝嗣則住持ふ向ひて方僧當寺の門前ふ天降りし狐龍の化石い咱ぬと由縁ある白狐の終焉を示せしと其故い箇様々々と政木狐の事の顛末他い孝嗣の母ふ受しる舊恩を報ん為ふ去々歳の夏前面の岡ふて妖狐ぬりて孝嗣の寃屈の死刑を救ひしる當日他い功課満て狐龍ふ変て不忍の池より升天まいる折後三稔を歴しらんふい當國ふて其終を見るよしあらんとのひしまで説示して又いふやう。這奇事い我のみるふぞ當時犬江親兵衛も目擊まいる所ふて狐龍の先言果して違ぬぞ一大奇事ふいはんぞとのみ詳なりければ主客齊一駭嘆ぞ異聞なりとぞ稱ける。當下孝嗣又いやう右ふ就て咱ぬる情願ありいらぞ件の狐龍の化石を當寺内ふ埋葬して塚を築まく欲ぬ。雑費い大田木へ歸城の後必調進

致さんべーとゝを住持いたして其義あるえいべども當寺の上總介廣常の五輪石塔婆あり在昔近衛院天皇の御時に妖狐変じて宮殿玉藻前に化て帝を惑しまゐらせかべ詔して天文博士加茂泰親に禳せるべ妖狐竟に勝ぎして走りて下野なる奈須野に到て躲れゝり於是三浦介義明上總介廣常千葉常胤等に詔して奈須野に到て狐を獵ましむ件の妖狐廣常が射箭に竟に斃されて化して一箇の毒石に做りぬ世に殺生石是なり彼と此と異なれども其政木狐とやらんの化して石に做りゝるを當寺に埋葬致なべ是廣常の忌む所那靈安かりぎやあるべらん這義怎麼と談ぎるを孝嗣に問べ長老の言錯り那九尾の妖狐玉藻前の小説に近曽明船の齎しゝる封神演義に倣ひゝる稗官者流の新作に素よりあるべき事なりぎ然を昨今世に見れる下學集に是を載又能樂の謡曲にも殺生石と題目して作設ゝるけれど奇に走る今の世俗にひもて傳へて故事と思ゝり那奈須野なる毒石に砒霜礬石の類なるを所會してのみならん非如其事にありとそも玉藻如きの邪物に至る所人に尊ぶ政木狐に靈狐に勤所世に功あり廣常這理を知らざりんや那人倘靈ありしとも決て忌嫌ふべらざど長老とろ安るべーと解ぎて住持に頭を撫て拙僧軽忽にして失言せりいるで海容あれゝーと勸解れに宗盈執合ゐて政木主説ゐて妙に長老も亦出家の本性怒を飾らぬ人の及ばぬ所ゐて共に感心の外なぎ那化石を牽入ぎて埋るまその夫役なりに卑職都て般莊容に課せる事ゝく計のてんとのみに住持も孝嗣も相歡びゝ是を謝して要談既に果ゝべ住持に辭して退りゝ登時又役僧に沙弥に課て茶を薦め果子を薦めなどする程に信隆に孝嗣の戈を感じて旦のやゝ大全主に妙年なれども玉藻狐の事なども論難老儒も及ぶべらざど就て学問せまゝ狐龍の事に何なる書に載るせ。

知らぬ。必出所あるらん。少まく欲しうぃと問い孝嗣然いとゝ狐龍の事ハ曩ハ
大江親兵衛ハ既ハ見る所ありて。奇事記ハ出ようとのひゝ今按ずるハ淵鑑
類函狐部ハも載れど。空言ゝらんと思ひしハ疑ひ解ていまとのふハ信確點頭て
現ハ書ハ見るべき者ゝ。今博識の教ゝ誰ゝ狐龍の出所を知らん然び是ハ
優者ゝ。然ども狐龍升天の事ハ就て猶疑ひ思ふよゝ。嘗聞義實
老侯少ゝ時結城落城の日ハ死を免れていうで安房へ渡さんとて相模ゝ
三浦の海邊ハ船を徴めるハ程ハ白龍俄然と海より起りて天ハ登るを見
るひハ色とのゝ。龍ハ鱗虫の君ハして其徳を王者ハ比す。源氏ハ素より金徳
ハそ色ハ白を貴ぶ。然いハや義實主安房ハ造りて幾程もなく神餘ゝ蠱ハ
義旗を揚て逆臣山下定色を誅戮せ。より。満呂安西さ人伏誅して安房西
郡を併呑し。更ハ上總を討従へてをさゝ賢君のゆえゝり其子義成主又

出藍の譽れ高く。遂ハ上總人の従ざるを威服し。下總半國を討靡け善政施
さるハ所ありて國民皆堯舜の思ひを做せり。其仁義良善の君ゝるを思ハ今の
諸侯ゝ。ものども儔ゝるべくもあらぬ。列又八大士及和殿の如き英武賢士の良
臣ゝ。旦白龍の祥瑞ありしを思ハ竟ハ足利氏ハ代りて天下の連師ゝ。べき者ハ
必里見氏ゝるべきハ然いなくて東南の一隅偏小ゝる。安房上總を領まるのミ下
總半國の外ハ又地を増ゝるを。去歳の冬両管領と戰克て偶攻捕ゝる敵の
三四ハ固城ゝ。和睦の後ハ返し與へて。鄙語ハ語ハ濟ても三百労して功ゝ
ども。然び祥瑞ゝ負きゝ。仁義ゝ亦益ゝ。賢兄必辨ゝ。何ぞハ
と論ずれば。孝嗣莞爾とうち笑て否我思ふ。那白龍の事ハ
ゝも孝嗣ゝ亦傳聞ゝ。那時龍田の老館ハ龍の服をのミ見ゝて龍の
頭を見ゝ。因て思ふハ老侯御父子ハ仁義賢明の君ゝれども。徳を

中國の施を受ぶ反て八犬士の如き賢佐腹心の良臣を得ぶ祥瑞
のりけん又那時隨從の両家臣杉倉氏元。堀内貞行が只其龍の尾を
見さるに子孫末世に至るまで當家の隣幸さるべ祥ありけるいまだ知
然べ君賢にして臣も亦賢なれども只褊小の國を有ちて兵馬連帥の大權
執るに由なき者和漢に多ろ是則天之命之請唐山漢末三國の成敗より
是に譬ん那昭烈劉備字玄德い賢君之當時十八諸侯のりとめども其仁義忠
信に及ぶ者なし。且是に相る者諸葛亮龐統法正費禕蔣琬
馬良姜維の如き賢佐忠誠の衆臣あり又五虎の勇臣関羽張飛趙雲
馬超黄忠の如き者數ぶ多けれども呉魏を討滅げて漢室を再興
まるとなめど巴蜀褊小の地を有ちて僅に帝號を稱まるのみ是則天之
命之人力の及ぶべ所にあらず後帝劉禪不肖にして佞人黄皓を愛ぶ

父子俱に二世四十餘年にして國亡びぬ。初昭烈の蜀に入りし時成都に
火井のり是より七其火漸に壯なりぬ漢に火德之色に赤を貴べり是昭烈の漢に
續て大位に即ぶ祥之とのり然べや其帝號を稱まるに及ぶ件の火井のり燃て
間断なし。低而昭烈帝に崩ぶ諸葛武侯も薨じぬ其火漸に衰て後竟に
燃ざるなり有低れば其火井に昭烈の爲に祥瑞なれども後帝に凶兆之又曹操
曹丕に漢賊之曹丕が漢の獻帝に逼りて其位を簒ふに當りて魏王宮前
に露井より黄龍出て天に升りぬ魏に土德にして色に黄を貴べり則是曹丕が
漢帝の禪を受て大位に即ぶ祥なりとそ年號を黄初と号れども其実に
簒奪之何の受禪に是ぞ龍譬べ曹丕の如き人を結扨て其衣裳を剥
合りて我這人より。衣裳を恵れりとのが如し。然を天神地祇順逆の理を
知らで只其勢利に媚るの故に以祥瑞を降さんや縱其事ありとも偶然に

彦嘉瑞ありぐ。然べあや順逆邪正差あるども。魏も亦蜀漢の後る者僅ふ一稔竟の司馬氏の簒奪せ〻まて。あも亦四十餘年ふあて國既ふ亡びふけり。是ふ由てふの主を觀れべ成敗をもて人を論まる者い天命を知らざるこ又徳を脩ぎ〻て祥瑞を負ま〻。みぐ〻ら允さび世の胡愿ふるらんの〻最憚りあるとみぐ〻。老館の見のひ〻る。那白龍の祥瑞も亦當館の御善政も城を屠り地を畧〻て我封内を廣くまぐ〻為ふあ〻ぎ民の父母ま〻る心をもて國安ら〻ま〻と思召ま〻の〻人分を知ざれべ貪て飽ことるーー貪て飽ことるけれべ苗害蹂を旋もべ〻〻ぐ。非如我君房總両國の守ふ〻て。地を増ふ〻ふ〻ぎとも良將の御名後世ふ流芳〻て。御子孫長久ら〻んふ。仁義善政の大益あり。仁君賢者の慎懋めて常ふ樂ふ所い只是の〻何ぞ裨益ら〻ーとのふや。ま〻れども陽春白雪ふ調高ら〻。恐ら〻く俚耳ふ入りがら〻ん。と思ふい什麼と理を推て言詳ふ

辨ぎれべ信隆ふ阿とぎら〻ふ一霎時感嘆の聲を沿さぐ又宗盈も通豊も膝の杖むを覚ぬ〻ぎふ耳を敬け心を澄て正論々々とぐ稱ける。姑且て信隆ふ急ふ貌を更めて孝嗣ふ謝ーてのふやう。通愛さ和殿の英才今の世ふい多く沿ぐ〻ー。里見殿の盛徳ら。八犬士さ和殿さ王佐の才ある賢者ま〻を得ふひぬることを幸ま〻れ我聞所をもてのぐ山林房八と和殿を犬士の外ふせ〻ん造化の小児の〻脱落欠然ぎふ是も天命ら〻ん。惜むべ〻〻。與言ま〻孝嗣応せ〻庭の樹立を見久〻て日景ふ既ふ斜ふ〻ぬ。所要ふ風く果〻ふ鈍や晤譚ふ時を移〻ぬ退りて路をのぐべ〻ーとのべ信隆諾ま〻ひて咱ま〻も潛行ま〻ふ虚々とぎ〻居ぐ〻ふあ〻ぐ。卒供侶ふと身を起せべ宗盈と通豊ふ留難ら〻自送る程ふ役僧も亦出て來て且管待の疎畧を陪話て玄関まぐ〻送りける。俟而武田信隆ふ伴當をのぐ〻ー立て別れて廳南へかぐ〻ふ程ふ孝嗣も

亦伴當を従へて。這邊なる村里を漏さず巡歴ちらけり。小程ゐ武田信隆ゐ其通路思惟るゐ里見君臣の英武戈幹。且政木孝嗣の妙論理辨ゐ感服して。及びぐさを心ゐ恥て是より機変を行ふとなく。生涯里見ゐ従ひけり。然ゐ政木孝嗣ゐ又幾の日を累て上總へ赴くを東西と經歴ちゐ遂ゐ武蔵へ立踰て三親の墓詣せーるゐど既ゐ前回ゐ具られゐ言肖て寫さぞ看官前後を照して見るべ。低而政木孝嗣ゐあの年九月の下澣ゐ届りて雑色村まで入り來り躱て金光寺へ立よりて。曩ゐ住持ゐ憑ぶ。狐龍の塚を閲まるゐ廣常の五輪石塔婆を去ること五十歩許ゐと件の化石を埋めて所ゐ塚の高さ三尺許ゐ。上ゐ一ゐ固の宰都婆を建て孝嗣心欽ぶ。寺の玄関ゐ呼ひて。却役僧ゐ謝礼を舒て退りて大田木へ歸城ちゐ其後使を金光寺と館山の城へ遣して住持と江田宗盈ゐ化石埋葬の雑費を選べ。

又金光寺ゐ米銭さえ布施して飲びの心を盡ける。然程ゐ土人ゐ其塚を見て奇特を稱て訛りて狐塚と喚做たーるゐ金光寺の山號ゐ。古塚山の古の字を易て狐塚山とぞ唱ける。按ずるゐ房總志料上總部雑色村の條下ゐ云古江の金光寺ゐ狐塚ゐり。今ゐ其所知まぞ是ゐ因て金光寺の山號を古塚山とのーしを。後ゐ狐字を嫌ひて殷酉王山と號まとりて又廣常の石塔婆の苔蘚の瘢痕を治まるとなども。同書ゐ載るを借用を看官作者の用意を知るべ。間話休題。是年八大士も。婚姻の後義成主ゐ請ちりて各故郷ゐ赴りて二親及親族の墓詣せーとなどゐ既ゐ前回ゐ寫ちー如ー。开ゐ中ゐ犬塚信濃成孝ゐ曩ゐ義兄弟ぞゐ貸ちる金をゐの時送ゐく選して。雑費の資助ゐ受けり又大山道節が二親と異母の女弟濱路の墓を安房の延命寺ゐ建るゐ及びて成孝又其資助ゐ受て勘ちぞ濱路の墓ゐ大塚が建べりーを道節ゐ圓塚山ゐて濱路の横死の折ゐ

環會て且其寃家網乾左毋二郎を擊殺し。又濱路の亡骸を火葬たけ因縁あり。支是始めて終まくいめるべくもぎとそ。強て施主のるりくるゑ是ゆゑに上の略してあるを詳を看官前後を併見るべし。却説政木孝嗣い大田木へ歸城の後稲村の城へ參上りて。飯府を告奉るゐ大塚大江大村の三犬士も既に出仕してあり。孝嗣へ親兵衛ゐ狐龍化石の事の趣を云々と告知らせるゐ親兵衛自餘の二犬士も其奇ゐ驚くまでゐ靈物の終めるを。俱ゐ感じめくりけり。恁而件の三犬士義成主ゐ政木孝嗣が國中を檢歴を果て謝恩の為ゐ參上りしを告まつりしを。義成則孝嗣を召よせて。旅中の事を問ゆゐ件の三犬士も付りて當下義成主い孝嗣を近く付らせて。汝經歴の間我封内の要害い皆檢たつゝん意見もわゝ。ゆゆまくかゝを仰ゐ孝嗣額を衝て然ゝ御要害皆堅固ゆゑ禀上ゆるもいなぞ。但し國府臺の一城い前い暴河ゆゑ後も岐川るれゞ大敵を防ぐゐ足れり。

然けれども。後の川い淺瀬ゆゑ其實い沼〻暴ゐ臣を那里ゐ在りし日件の川ゐ鶴の降て求食を見う。敵倘其淺沼るを知りて鬨戰廚るゝん時渡して城の後より稠人らべ防ぎぐくやいん。とのゆをうちゆゑ大塚大江い愕然と面を注して臣も暴ゐ那城内ゐ在りしを。其義ゐ上るとそ幸ゆりけれ。とのべ義成主點頭て好々我とろゆゝう。秘よくと推禁めて其後國府臺の城の頭人真間井秋季繼橋喬梁ゐ書を賜りて悄地ゐ其義を戒めゆゑ。其書の末ゐ遠くゝもむゝべ隱れゆゑ敵の見えぬゝ。ろゐ用心をせよとありしゝべ秋季喬梁謹兼て城の後ゐ由斷せぬ戍を固くゝ。をさりしゐ是ようの後數世を累て里見義弘の時ゐ至りて北條氏と國府臺の鬨戰ゐ敵那城の後の岐川ゐ鶴の降るを見出して淺瀬るを悟りしべ一隊い急ゐ城を攻一隊い悄地ゐ後る淺瀬を渡し塀を破りて短兵急ゐ

攻入りければ里見の士卒は勝ぎーて。竟に落城をくりとのふ益義弘い武勇餘れども文学の疎ければ先祖の遺訓を知ざやゆりけん惜むべきの事ぞ。今國府臺の城迹を見るに那岐川は横八九間もあるべき深水ゆえ鶴の脚の立ずもあらぬ。今の如くなりんは敵の輒く渡ーがたきんは當時は実は浅沼なるは暴河の水を引入れて川の如くに見せるなるべー畊田鋤れて海となる古今の変革疑ふべからざる故を温て新を知るを学を好むとのふべきなり是後の話之却説大江親兵衛いはの日義成主は政木狐の古文の顛末は固様なると告禀せば又政木孝嗣も狐龍の化石は做りて金光寺の門前は天降りーて寺内の埋めーるなる笑を上るは義成連りは矢局は入りて餘談盡せば見えるは。はの段は猶長ゆるなれば這勝回も上申下は登壇て又下回は解分るを聴ねー。

南總里見八犬傳第九輯巻之五十一終